

『十八世紀におけるニューヨーク市カートメン』

茨木 慶三

はじめに

いわゆるニューレフト史家レミッシュ氏(Jesse Lemisch)が、「過去の社会を頂上からではなく、むしろ底辺から、社会的発言力をもった人々よりも、むしろ無告の民の観点から描く」^①ことを唱えてから、既に二十数年を経過した。

ところで筆者は、先に、十八世紀のニューヨーク市(以下単に市と呼ぶ)メカニック(以下MCと略記)に関する一連の論考を発表したが、^②そのなかで指摘したように、「MCには様々な要素」が含まれ、一括して論ぜられないものがあり、本来は、それぞれの場合を検討しなければならぬわけである。ここに本稿が、主としてホッジズ氏(Graham R. Hodges)の論究^③に基づき、カートメン(以下Cと略記)をとりあげ、その特殊性をより具体的に考察しようとするゆえんがある。

一 革命前のカートメン

① イギリスでの経験

④ そもそもロンドン市では、公共性(適正料金、必需品買占め防止、非行撲滅と繁栄の基礎である商業促進の観点から、カーティング(以下CTと略記)を含む運送業の組織化と規制が必要とされた。⑤ 一五二七年、Cのロンドン市との最初の契約が、既に同市の支配下にあったポーター組合との場合を参考にして作成され、手数料を受けとった市長が免許したCは、市内での営業独占権を入手した。その後Cは、道路清掃を義務づ

『十八世紀におけるニューヨーク市カートメン』

けられたほか、公民宣誓と保証書の提出を求められ、また、彼らの作業料金が設定・公示された。①十七世紀、任免権を取り扱う市長と、言動を取り締まり、料金を決定する参事会が、Cの福祉の守護者として確立した。すなわちCは、市当局や雇主（大商人）でもある市政政治家に拘束される反面、ロンドン市は、もぐりからの保護と公共事業契約を提供した（これに対してCは、通商および消防・衛生などの公務に労力を約束。なお、公民権とそれに基づく特権は、ロンドン市とCとのこの家族主義的関係を接着するものであった。②しかし得意先には恭順なCは、一般市民には粗暴で管理が必要とされ（参事会は、鑑札の発行、交通巡査や監督官の任命、罰金の強化によって取り締まった）、両者はむしろ敵対関係にあった。④

② ニューヨーク市での絆の創設（一六六七～一七〇〇）

①モリス（Richard B. Morris）ロンドニア大学教授が指摘したように、新大陸の環境に応じて調整してではあるが、「植民地人は、明白にイギリスでのやり方を採り入れ」^⑤、市は、相似した英蘭の文物・制度を参考とした。③一六六七年、労働力不足、共同体意識、免許手数料収入に鑑みて市は、消防義務を条件に八人のCに組合結成を認め、営業の独占を許した。さらに一六七〇年、この八人をCとして確認後、塵集めなどの公務を課した（Cの半吏員化）が、この確認は毎年なされ、市吏の政治的引き立てによるものとされたため、免許更新は、政治家がCに忠誠を強いる手段となった。④Cの非行（公務拒否や乱暴な言動）に対処するため市は、保証書や信用証明書を提出させたり、免職にしたりしたほか、Cの一人を「頭」に任命して彼にトラブルの報告を命じた（Cの自治の伝統の確立——なお「頭」は、CTでのリーダーとなり、当局との交渉でCを代表した。しかし彼らはしばしば、当局の期待を裏切ったため、市は、彼らを罰したり、密告者制を採用した。Cは、支配権をもつ当局には恭順であったものの、一般市民には往々敵対的であったが、Cの必要性を重視した当局は、彼らとの絆を強めるため、小言をいったけれども、むしろ彼らの保護に努めた（若者や黒人のCT就業禁止）。⑤一六七七年、ストライキへの最初の刑事訴追と考えられる事件が発生した。すなわち参事会は、不服従・義務不履行のかどで二人のCの職を取りあげ、処罰した（Cは、罰に服して復職）。また一六八四年Cは、薪の販売および、穀類荷おろし作業に関する規制への不満からストライキを実施した（Cは、一週間後に罰金を払い、遵法を誓って復職）。しかしこれらの事件は、モリスらの解釈するよう^⑥な当局の勝利というよりも、当局とCの相互依存関係の増大を示すものであった。⑥その上Cは、相互に親密に結び付いた貧しい長期居住者で、多くは、最貧地区を含んだスミス小路の小仲間社会に属していた。またしばしば彼らは、長期CT免許を与えられたばかりか、市の低い公職を兼ねたり、Cをやめてから与えられたりした。⑦一六九一年、Cと市は、CTに関する最初の真の条例（免許料を年六志とし、荷馬車の賃貸し

を禁止し、一荷三ベンスでの塵集めと波止場から商業地区までの運送の輪番制を設定し、小違反への処罰は停職をやめ、科料を課すことなどを定めた。に同意し、また一六九六年には、公民権がCに付与されてCの権利が拡充され、Cと市との絆が強化された（Cは営業独占権≡非市居住者や黒人の排除を保障され、また投票権によって、市政への影響力を行使した一票のほしい政治家は、Cにアッピール）。さらに当局は、Cの長老に公職や公共事業契約を与えて彼らを懐柔した（パトロネジ）。こうして十七世紀末までに、市・大商人・Cの間に絆が確立されたが、とくに公民権は、この絆の支柱となり、免許過程での主要な要素となった。^⑦

③絆の確認（一七〇六～四五）

△A▽ ④富と政治権力の基礎である交易にかかわる職業は、忠誠維持のために市が十七世紀に企画した営業独占を保持した。一方市は、経済への貢献に比例して交易関係者を引き立てる傾向があった。しかしCは、市長・参事会から排他的保護を与えられたにもかかわらず、ときには市政府を支配した大商人に反抗を示した。市吏は、トラブル解決のために共同体家族主義の力を用い、Cとの共通の立場をみい出すことに努め、ここに市は安定した労働力を、Cは営業独占を継続保持できたのである。⑤公民権付与は免許の事実上の一部であったが（一七〇〇～四五年の被免許者二〇一人のCの内、九〇人は公民）、十八世紀初頭以来参事会は、免許料六志を払えない貧者にも、投票資格は三カ月の待機後有効との条件を付けて、無料で公民権を与えた（上記九〇人の内、四二人は無料入手）。因みに、公民権は一七五〇年までにその経済的価値を失い、また、選挙の接戦のときのみ政治的価値をもったとの説は、Cにはあてはまらない。それは、彼らに重要な経済的（罪を犯さないかぎり解職されず、営業の独占を保障し、また、有利な公共事業契約や低い公職を提供）・政治的（参政権を付与され、自利を保護する政治家のみを支援して、目的を達成）利益を与え、かつ市との絆を強化した。⑥Cの福祉に関心をもった市は、不況時に却って最高運賃の値上げを認めたが、二つの規約（最初は一七二九年の不況時）を公布してCの規制と保護を拡充した。すなわち、違法への罰金をリストし（薪と干し草に関する不正に厳罰）、距離や重量などに基づいて分類された運賃表（普通の品は半哩毎四・五ベンス。輸入品・火薬などは高く、塵や薪などの必需品は安い）を定め、またCの任免は、市長の専権事項であることを明確化したほか、馬車のサイズの標準化、免許番号の明示、夜間運行と騎乗の禁止、若者や黒人の就労禁止などを命じた。

△B▽ ところで、①Cは、自分の好みの場所で開業（特定商品を専門に扱うものも発生）したが、いくらかのCは、特定の家に専属したり、諸商人の定期的運送人となり、相互信頼関係を築いて、収入の安定、借財、身元保証の便を計った。②トリニティ教会の記録によれば、Cは、通常

一日約三志を稼いだ(禁令に背き、黒人を助手とすることあり)が、二封度一三オンスのパンが四・五〇三・五ペンスであったから、富裕ではないとしても食うに困まらなかった。もちろんCは、市の公職に就くなど副収入をえたが、この期では一般に蓄財することは困難で、また、より貧しい地区に居住する傾向があった(一七三〇年のCの多くは、富裕なドック区「資料によれば二・九%」ではなく、貧しい北区「同、四一・二%」や西区「同、二〇・六%」に居住)。^⑨一方、Cの在職期間は長く(先述の一〇一人の内四〇人は、三〇年以上)、しばしば家業として世襲され、また、同業家族間の結婚や一族同業の現象がみられた。さらに、Cが就任した市の公職も往々世襲され、ネポティズムが特徴となった。ともあれ十八世紀前半に、絆は確認され、Cの人数も重要性もその意義を高めた。^⑩

④ 拡張と繁栄(一七四五～六〇)

△A▽ ①一七四五～六〇年に市は、経済・社会のあらゆる分野で未曾有の成長を遂げ、全階級の生活が豊かとなった。Cの場合、運賃は上昇して少数のCは蓄財、また、需要増大に伴って市長は免許を急増し(クルガー「John Cugler」)市長は、その任期「一七五六～六五」中に新しく三八六人に免許を付与、Cの数は従来の一〇倍となる)、かつ大商人の意向を酌み、新被免許者に公民権を与えてCと市の絆を維持した。^⑪しかし高収入と完全雇用は、労働者と雇主の姿勢に変化をもたらし、ナッシュ(Carry B. Nash)カリフォルニア大学教授が、この期に到来したと示唆した利己意識^⑫が共同体への忠誠心と競合した。参事会は、塵集め手数料や運賃表の改正(値上げ)によって、Cの営業独占のみならず既存の規制を再確認するとともに、利己意識の昂揚に対して、CTは公共性の強い重要職業であるがゆえに規制を緩和できないとして、むしろ規制を上げた。けれどもCは、それらの規制で苛立つことはなく、またそれによって、Cと市吏との緊密な個人的共同意識の絆が再確認された。^⑬一方市長は、参事会のCへの既存支配権の多くを自ら掌握、市長がパトロネジの中心となり、支配力を弱めた参事会は、市長に左右されるC集団を恐れるに至った。

△B▽ ①十八世紀半ば、ユニークな政治力をもつCの経済的地位は、通説の評価(職人より下、萌芽的プロレタリアより上)^⑭よりも高かった。しかし、アーティザンと下層労働者の社会的懸隔は、前者と大商人のそれと同程度に大きいと考えられたので、Cは、大商人ら上流層から軽蔑され、彼らに服従が当然とされた。^⑮もっとも実際、Cの収入には極めて変差があった。いくらかのCは、専ら大商人のために働いてかなりの財を成し、多くのCが自由土地を保有、四〇磅の資格を満たし、代議員選挙権を有した。ナッシュの表からすれば、彼らは、ほぼ造船業のアー

ティザンのレベルに位置する。¹⁴ 実際、Cほど政治力を持ち（例えば大工や船員は、Cほど普通選挙権をもたなかった）、また、市との共同体的意識に確りと結び付けられた非エリートはなく、この絆は、Cの地位にとって有利に作用した。¹⁵ その上、この期でも長くCを続けるものも多く、また、長期間借地してそこに家を建て、仲間社会を發展させて安定性をえた。¹⁶ 一七六〇年までに免許された二二五人の内七五人（¹⁷）が、富裕なトリニティ教会の借地農となり、また、又貸しや土地投機をして、豊かとなった（他の場所にも、土地保有や借地の例があった。この教会農場（Cが多く住み、一七九〇年代の「C区」の先駆）を占有したCや他の労働者は、典型的な労働階級の近所付き合いを創設したが、一般にCは、雇主であるエリートから離れて住み（職業による分離の進行を示す）、独自の文化的環境を創造した。以上、この期の市は榮え、Cは増加したが、彼らの市や大商人との絆は維持され（公民権はその支柱）、またCの地位は向上し、かつ、Cの仲間社会の出現は強い同認識を高めた。このような特徴が、独立革命直前の諸事件でのCの行動に影響したのである。¹⁸

二 革命・建国期のカートメン

Ⅰ 革命期（一七六〇～八三）

△A▽ 七年戦争終結による経済不振は、本国の課税強化によって激化し、対英抗争による政治的騒動は、ポピュラーリーダー（以下PLと略記）の台頭と民衆の政治参加の増大——ファミリーポリティクスの崩壊、特権政治から機会の政治への移行をもたらしした。¹⁹

△B▽ ①Cの場合、一七六〇年代初めは従来と変わらなかった。Cは、依然として二面的であった（Cは、政治力をもつ一方、大商人や市政府に依存、またCは、エリートに恭順である一方、一般に粗暴）。また、本国軍に雇われて収入をあげるCもいた。²⁰ 一七六一年の代議会選挙でCは、免許、参政権、労務契約を提供してくれたクルガー市長を一番支持して当選させ、政治家にCへのアピールの必要を気付かせた。²¹

△C▽ ①印紙条例危機²²でCを含む民衆は、代議会の阻止も空しく暴力を振ったが、自由の息子の司令部であったモンテニュ酒場（店主は、いくらかのCの親戚）は、Cと自由の息子の共用の溜場となっていた。²³ ②市での一六八八年の代議会選挙でCは、印紙条例危機のとき、印紙なしでの営業に反対して、民衆を困窮させたとして弁護士たちを非難し、また、MCと大商人の相互依存関係を強調して勝利したドランシイ（以下Dと略記）派に、敗れたリビングストン（以下Lと略記）派よりも多くの票を投じ、政治家のCへのアピールの価値の増大を誇示した。²⁴ ③タウンゼ

『十八世紀におけるニューヨーク市カートメン』

『十八世紀におけるニューヨーク市カートメン』

ント条例に抗議した、マサチュセツ回状を支持したかどで解散された代議会の改選（一七六九）^②において、市では、前年同様の主張をしたD派が四議席を独占したものの、L派が英国国教会支持を理由にD派を攻撃して、非国教徒の支持を集めんとしたため、勝敗の差は前年より低く、また、PL同様Cは分裂した。ただし、前年より政治熱がさめたためCの投票数は減じ、また、トリニティ教会とのよしみ（教会農場での居住、教会での婚礼、教会による雇用）を慮ったCはD派に投票した。^③有名なゴールデンヒルの戦い（一七七〇）^④に、Cが参加したことは疑問の余地がない。また市場移転闘争（一七七一年参事会は、衛生・交通上の観点から、ブロードウェイの中央にあるオスウィーゴー市場を廃止して住居地域はずれのハドソン河畔に移転せんとしたが、客への接触困難を憂えたCや肉屋の反対のために失敗、ブロードウェイとメイドン小路の交差点に新市場を設立した）は、Cの間での伝統重視を示すとともに、政治領域での分裂とは違って、Cを団結させた点で注目に値しよう。^⑤しかしCが、民衆の自立、エリート離れを象徴した「MC委員会」（一七七四年発足）^⑥に参加しなかったことは、革命後のMC一般とCとの分裂を予示するものであろう。⑦開戦時Cは、愛国（クルガー市長が免許したCでは、その二九％・勤王（同上、一三％）両派に分かれた。Cの選択の理由は様々（古くからのつきあいや、軍への補給契約など）であるが、両派とも市への愛着の絆は強かった（永年勤続者や、その子孫が多いため）。⑧⑨本国軍占領中、Cへの免許や規制は継続された（一七七八年には、Cの警察への登録、無料免許状受領を命じ、また、警察が介入して非行者を処罰した）が、計量や物価・運賃統制は効果なく（主計係は腐敗、とくに燃料計量は完全に崩壊）、イギリス将校やCで大もうけをするものがいた。^⑩また、本国軍に雇用されて利益をあげるものもいたが、戦時中富裕化するCと、貧しいそれとの区別が生じた。なおCの組織化が進み、大商人のために機能した商業会議所との交渉でCTを代表する「C委員会」が創設され、運賃値上げを認めさせた。^⑪以上のように、革命期のCは大きな変化を経験した。すなわちCは、政治的発言権を増大し、時には直接行動に訴え、また同業意識を昂揚させた。しかしにもかかわらず、Cも市民とともに望んだ規制は継続された。

②戦後期（一七八三～八八）

△A▽ ④一七八三年一月、本国軍が撤退したとき市は、七年間の戦争で局地的に荒廃し、また、戦中からのインフレとCらの詐欺行為などの悪行がやまなかった。戦後も、市長（任命院に任命され、免許を含むパトロネジ権を留保）や参事会（一定の自由土地保有者ないし公民に選ばれ、立法・課税・通商規制・下位公職任命権をもち、市長とともに市司法部を担当）の権能は変更されなかったが、それより先、秩序再建・経済安定（ために商業の促進、Cの安定して有効な信頼できる奉仕が肝要）を願う暫定市評議會は、植民地時代の主要日用品やCへの規制条例を復活させた（最高運賃を戦前レ

ベルにもとし、買占め・詐欺・就労拒否を厳罰²⁹。㉔市での独立後最初の参事会および邦下院選挙戦（一七八三年二月）で、MCの大商人への依存を理由に、大商人への投票を勧告するビラが撒かれたが、「MC委員会」が指名した候補者（PLを含む）が圧勝、MCの政治権力への上昇を画した（その後MCは、独自の候補者の指名を続けた——ただし、資料不足のためCの参加の程度は不明）。また、MCがトーリイへの免許付与に抗議したため、本国軍占領中の公民権被交付者のCT開業は禁ぜられた（一七八四³⁰）。なお、復員軍人、アメリカ人捕虜優遇者、戦前からの市居住MC、戦前のCの子孫などが、免許をえる有利な条件であった。㉕参事会は、公民容認条例をパス（一七八四年三月）、デューン（James Duane、在職一七八四—八九）市長ら保守派の躊躇にもかかわらず、Cの労力の必要に鑑み、一七八五年までに三二一人のCを公民として認めた。ところで戦後、職を求めて来住する人々で人口は急増したが、無免許者はCTを開業できなかったのに反して、被免許者は、市から公共事業契約をえてもうけることができた。ここに、Cと友好政治家との相互依存関係、絆の存続が明らかである。また市は、免許志願者に保証書の提出を求めたが、好ましいCへの監督ポストの振り当ては、Cの間での財産・身分差と、Cの自治の存続を示すものであった。㉖一七八四年の市での定期邦下院選挙では、反クリントン派（保守派）が勝利し、また同年九月の参事会選挙では、前年末に当選したCと取り引きのあるなわ造りが、ある保守派大商人に敗れた（急進派没落の前兆³¹）。㉗一七八五年は不況の年で、Cは、市長に仕事不足を理由に免許打ち切りを請願した。一方、保守派と合体してトーリイが表面に出ると同時に、富と地位をえた革命期のPLのいくらかが保守派と提携、また、強力な中央政府を求めて、「MC委員会」が大商人と協力する傾向が生じた。さらに同年の市での邦下院選挙戦では、MC自身を議会へ送れという声があがり、ある論者は、三人のC（いずれも、市長からの公民権被付与者でなかった）を含む二六人のMCを適任として推挙した。しかし「商工業者協会」（MC委員会）を改編したものは、C以外のMCと商人を含む人々を候補者に指名した（数名のMCが当選。なお翌八六年には、一人のMCも当選しなかった）。思うにこのCの排除は、右の協会（中流層）と下層のMCとの相違、すなわちMCは、曾て考えられたほど一体ではなかったことを示唆するものといえるかも知れない。³²

△B▽ ㉘Cの免許状と公民権は、Cに他の諸職業への門戸を開き、またC自身、様々な職業を手がけた。すなわちCは、下位の公職、免許を要するCT以外の職業、一般手工業職に従事した。しかしとりわけ、公職が種々の理由（副収入やCT退職後の名誉職の確保、陪審員や民兵義務の免除、より有利な職への手がかりなど）で求められた（一八〇〇年までに市の引き立てによって、公民権保有Cの多くが、何らかの公職、とくに消防士の職を保

持。^⑨ ⑩ Cの生活パターンは共同団体的なもので、先述の教会農場（二④／＼B／⑤参照。戦前同様、Cに耕地を貸与）などに群居した。デュエーン市長が在職中に免許したCは三八五人で、全有権者の約一〇％と推定されるが（西区の一七％から南区の四％まで、区毎には様々）、その多くは、市から低い公職や公共事業契約を与えられ、その政治的掛かり合いをうかがわせた。なお彼らは、鉄輪問題（参事会への執拗な働きかけの結果Cは、騒音と道路損傷を理由として禁止された鉄輪の使用を、遂に一七九一年許可された）や、農民の夏季臨時CT就労禁止闘争で一体となって行動した。^⑪ 一七八八年市長と参事会は、Cを八組に分け、各組に「頭」をおき、取り締まり・雇用の責任を委ねた（市長とCとの日常の触れ合いは減少したが、Cの自治は前進）。また八七年両者は、呼び売り屋や塵集め屋を規制しないことにした。後者は、Cが塵集めの義務を嫌らったため生じたものであるが、結局、CTの免許をもつものとそうでないものとの争いを起こす原因となった。それはともかく、Cの乱暴な言動は、トラブルの要因であった。とくに、車や馬を放り出して飲酒するCが非難されたが、Cとの友好を願った参事会は、みてみぬふりを続けた。^⑫ 以上要するに、Cと市との絆の復活（公民権は、依然として絆の保障）と、C規制の存続がみられた。と同時に、Cの政治上の重要性が増大し、政治家は、彼らの希望にますます配慮せざるをえなかった。また、CとMC一般とは必ずしも一体ではなかったけれども、八〇年代半ばまでに、大商人とCを含むMCとは、強力な中央政府の必要という点で意見一致し、八八年までに同市は、フェデラリズムを受け入れる用意ができていた。しかし一七九〇年代には、一部のCは市当局や大商人に引き立てられて利益をあげたが、他のCは彼らを暴虐とみなした。この懸隔が、フェデラリスト（＝反クリントン派＝ナシヨナリスト——以下Fと略記^⑬）とリパブリカン（＝クリントン派＝反フェデラリスト——以下Rと略記^⑭）の政争における主要な要素となるのであった。

三 一七九〇年代のカートメン

① 一七八九～九二年ごろ

① 一七八〇年代末、市の経済・社会は活気を呈し、被免許C数は飛躍的に増加（九五年には千人以上で、八九年の約二・五倍）した。しかし、冷淡にして高慢、徹底したFのバリック（Richard Varick、在職一七八九—一八〇二）が市長になり、Cに公民権（そのCへの利点は、一③／＼A／⑥参照）を与えないことにしたため、大きな政治的反響を招いた（Cの分裂）。事情はこうである。富裕者の特権と大商人・MC同盟の維持を善しとした、参

事会での多数派Fは、MCやCの恭順と商業関係者への忠誠(それに基づいた投票)を期待して、彼らへの共同体家族主義の提供、彼らの投票権を含む諸権利の支持者となった。有力なFである前市長デュエーンは、彼らにもうかる公共事業契約や公民権を与えてCとFが掌握した市政府との絆を築き、一方八三〇八八年に免許をえたCは、この絆による利益を刈り取り、Fを支持した。ところが新市長バリックは、Cへの家族主義を継続する反面、景気後退がFへの反対を発生させることを慮り、Fに対して非友好的な人に投票を許さない方針を採用し、Cへの公民権付与をやめ、軌轢を生み出した。すなわち彼は、九一年早々までに被免許C数を約六〇〇人に増加したが、そのとき約二〇〇人のCは、無公民権者であった。その上彼は、市が燃料を買い、誠実・勤勉・老令・貧困を基準に選んだCを雇用して、それを配給する従来のやり方も却下したのである。³⁷ ④一七九一年夏新市長は、F候補に投票しないものの免許を取り消すとCに通知して、彼らを敵に回した。これに対して、W・S・L(William S. Livingston—F派州下院議員として選出されていたが、九二年末にF派国会議員候補に挑戦し、同派から政界の売春婦と呼ばれた人。かねて彼は、MCやCの支持を望んでいた。なおL家のリードする多くのFは、銀行をめぐる論争で反対派に寝返った)がCの擁護者となり、市長の態度を批判した。W・S・Lたちは、法の下での保護と平等、公民としての権利、不当な行為をした市長を最高裁判所の前で弾劾できることを指摘したが、彼らの論旨の重点は、公民権の営業権との一体視であった。ここにおいて、F派と世論が自分を支持するかぎりにおいてのみ、自己の政治的地位と権力を維持できることを承知していた市長は、守勢に立たされた。³⁸ ⑤一七九一年の参事会選挙前に、区境・区名が改変され、Cの本場(一〇〇へB)参照)西区と北区は、それぞれ四、六区と七区となったが、四、六区はF支持を続けたものの、七区はFとRとの支持に分かれた(なお、一七八三—一八〇〇年の参事会選挙での勝敗は、表I参照)。⑥とこころで一七九二年春、さらにW・S・Lは、現市長のCへの公民権否定を権力濫用と問

〔表I〕 ニューヨーク市での選挙における両派の当選者数(年号以外の数字は人数)⁴⁰

| 下 院 | | |
|----------------|---|----------------|
| C ₁ | F | M |
| 9 | 0 | C ₁ |
| 9 | 0 | C ₁ |
| 2 | 7 | F |
| 6 | 3 | C ₁ |
| 5 | 4 | C ₁ |
| 2 | 7 | F |
| 0 | 9 | F |
| 0 | 9 | F |
| 0 | 9 | F |
| 1 | 6 | F |
| 1 Rを除きF | | |
| 全 員 | F | |
| 全 員 | F | |
| 1 Rを除きF | | |
| 全 員 | F | |
| 全 員 | R | |
| 1 Fを除きR | | |
| 全 員 | F | |
| 全 員 | R | |
| 全 員 | R | |

『十八世紀におけるニュー YORK 市カートメン』

| 年 | 参事会 | | |
|-------|----------------|----|-----|
| | C ₁ | F | M |
| 17 83 | 6 | 8 | F |
| 84 | 7 | 7 | F |
| 85 | 5 | 9 | F |
| 86 | 4 | 10 | F |
| 87 | 3 | 11 | F |
| 88 | 1 | 13 | F |
| 89 | 4 | 10 | F |
| 90 | 3 | 11 | F |
| 91 | R | F | M |
| | 2 | 12 | F |
| 92 | 3 | 11 | F |
| 93 | 4 | 10 | F |
| 94 | 4 | 10 | F |
| 95 | 6 | 8 | F |
| 96 | 7 | 7 | Tie |
| 97 | 6 | 8 | F |
| 98 | 6 | 8 | F |
| 99 | 3 | 11 | F |
| 18 00 | 4 | 10 | F |
| 01 | 8 | 6 | R |

責し、市長の交替を目ざして、市長職を選挙で定めることを州下院に提案した。これは、Cの公民権喪失の不満を代弁するものであったが、否決された。^④さて、九二年の市での州下院選挙で六、七区のCは、自業に好意をもつ候補を支持するために諸酒場に集まったが、ある集会は万場一致でR候補たち（ただし、W・S・Lを含む）を支持した。第二位で当選したW・S・Lの全得票の三五％は六、七区（いわゆる「C区」）からの票で、両区が彼の勝利に大きく貢献したことが分かる。ただしトップ当選のFも、両区から自票の五三％をえており、Cが完全にFに背かなかったことも明らかである（なお、一七八三—一八〇一年の市における邦・州下院選挙での勝敗は、表I参照）。こうしてFは、市長のC虐待などのため、今までは堅固であったMC票の一部を失い、以後、支持者にはパトロネジを与えるが、反対者の投票権を拒否することに努め、これに対してRは、自己の政治標語を特定のMCに合わせるのが票になることを認識したのである。^⑤またC自身は、数の力に気付き、選挙直後いくらかのCは、「C協会」（その役員は概して市政府とコネをもたず、老齢・貧困・傷害者のCを援けることを目的とし、伝統と安定の重要性を確認）を創設した。^⑥他方、現市長を除くエリートを市長に推挙した（市民がなお、大商人に絶望していない点に注意）いくらかの市民の願いも空しく、一七九二年九月に再任されたバリック市長は、ますますパトロネジの力を利用し（例えば、ラム「Alexander Lamb Jr.」を登用して味方に付け、また、当局に忠誠で有用なことを証明した掃除夫にCT免許を付与、勢力の維持・伸張を計った。^⑦因みに四九年に生まれたラムは、七〇年代初めCの免許を獲得、結婚後トリニティ教会農場に移住した。七六年愛国派に加わって糧秣管理官を務めたが、戦後八三年C免許と公民権入手、鉄輪使用請願に参加して人気を博するとともに、市から公共事業契約をえてもうけ、また教会農場の土地を借り、かつ又貸しして蓄財した。一方彼は、デュエーン市長によつ

てC「頭」(八七―九五)、バリック市長によって夜警長(九〇)、六区街路委員(九三)、民兵隊指揮者(九三)にされ、さらに九五年、州下院議員に当選(一九六)した。九七年からは刑務所長(一九八)を命ぜられたが、九八年Cに復帰(九八―九九再びC「頭」)、一八〇二年死亡した。この間彼は、かなりの収入をあげたが(彼の九五年の査定額は、一二、八〇〇\$)、毎年諸免許手数料だけで五〇〇磅をえたバリック市長(その一八一五年の査定額は、一四四、二〇〇\$)と比較すれば物の数ではなかった(トップクラスのCと推定されるラムの例から考えて、多くのCにとっては大金持になるのは困難で、また、多くのCは貧しかったといえよう⁴⁵)。

② 一七九三―九六年ころ

△A▽ ① 一七九三年までに、Cの間に分裂が発生しつつあった。多くのCはFの傲慢に憤慨したが、他はFの引き立てで利益をあげた。また、いくらかのCはフランス革命に同情したが、他は親英大商人に味方した(岸辺でCの間に、英仏いずれをひいきにするかをめぐる殴り合いがあった⁴⁶)。② 一七九三年の市での州下院選挙で、Cの政治的・社会的分裂がより鮮明になった。R系紙「ニューヨーク・ジャーナル」は、前回選挙時の人気者Fのワット(John Watts)を狡猾で生意気と非難し、一方「商工業者協会」は、W・S・Lを支持することは不適当として拒否し、また、連邦憲法に愛着を感じた少なからぬCの会合は、Fの公認候補者を支持した。こうして六、七区における選挙では、F支持の急減(FのJ・D [John DeLancey]の得票は前年の半分)とW・S・Lの落選が目立ち、結局Fは、巧みにいくらかのCの忠誠を購うことができたものの、C大衆を協力させえなかったのである⁴⁷。

〔表Ⅱ〕

| 区 | ワット | リス ビン グ ン | 得票数 |
|----|-------|--------------------|-----|
| 6 | 96 | 358 | |
| 7 | 133 | 158 | |
| 全市 | 1,638 | 1,843 | |

△B▽ ① 一七九四年には、分裂は拡大した。市での州下院選挙で、「商工業者協会」はFの公認候補者を採択し、六、七区も強くFを支持したものの、両派の勝敗の差はより低下し、六区では、落選したRのP・R・L (Philip R. Livingston)が得票で第二位となり、六、七区合計で彼は、自己の全市得票数の二八%をえたのに対して、各Fは同二一―一六%をえたにすぎなかった⁴⁸。② 一七九四年末から九五年一月の市での国会下院選挙戦で、RのE・L (Edward Livingston)がワットを敗ったが、六、七区は前者を支持した(表Ⅱ参照)。九二年の市での州下院選挙で両区計六二九票を取ってトップ当選したワットは、CのFからの漸進的な離脱の影響をもろに受けたわけである⁴⁹。

△C▽ ① 一七九五年市での州下院選挙に当って、Cの一团が、Rの公認候補者を支持する目的で七区の酒場に集まって

(RがCからえた最初の信頼)、ラムを推薦したが、Cの一人を自派の候補者に加わえて自派の全候補者の支持をCからえようとしたRは、これに賛成した。これに対してF支持者は、Cが議席を占めることは不名誉だと主張し(高職は大商人の領分となお考えている大商人には、ラムの指名は侮辱であった)、また、Cと大商人の伝統的な相互依存関係を指摘して反論した。一方ラム自身は、諸物価昂騰を理由に、CTの運賃値上げを求めた参事会への請願を提唱・支持して、勝利を計った。結局ラムは、全市で一、五二一票をえて当選したが、彼に六区は四〇八票(全市得票数の二七%)、七区は二二〇票(同、一五%)を提供し、Cは政治勢力として名声を博した。しかし、RのCへの期待には問題があった。なぜなら、Rは自派公認候補の一ポストをCに与えにすぎず、またラムは、金も暇もない長年Fに知遇をえた陣笠で、将来強くFの政治に反対するとは考えにくかったからである。⁵⁰⑤Fは、知事選挙としては一七九五年に始めて勝利したが、Cを含む多くの人々はゼイ条約に狼狽した。受益者は、F支持者の多い大商人、土地投機家、富裕なMCで、庶民にとってそれは、横柄なイギリスへの降伏、革命時の友人フランスへの裏切りであった。Cの一派が、条約の長所を話そうとしたハミルトン(Alexander Hamilton)に投石したのは、このころである。こうして条約は、FとCとの分裂と、強まりつつあったCの政治的自覚を深めた。今や、曾って堅固であった票のまとまりが、急速に消え去りつつあった。その上なおFは、民衆のエリートへの服従を政治的社会的礎石と信じ、また、パトロネジによって民衆を懐柔しようとしていた。しかし、パトロネジの多くは有権者にのみ留保され、かつその数は減少しつつあり、公民権や市長とのコネを欠くCは、それを期待できなかった。しかもFは、エリートへの服従心の減退と社会の退廃とを同一視し、古い公民権保有Cが満足した低い公職以上のものを欲する新しいCと、政治権力をともにする気にはなれなかった。こうして、とくに九五年以後Fは、バリックが始めた高圧的なやり方を強化し、R系紙が名付けた「恐怖時代」に乗り出し、CがFを支配した大商人と伝統的に結び付きがあるがゆえに、彼らを最優先の標的としたのである。⁵¹

△D▽ ④一七九五年末、恭順強制が問題視された。すなわち、「テティス」号事件(市長が、反証を無視して、イギリス側の逃亡者との主張を受入れ、英戦艦「テティス」号に囚人を引き渡して海軍に就役させ、暴君イギリスに協力したと非難された―庶民のゼイ条約への憎しみは倍化)と渡船場船頭事件(F派参事会員侮辱の口実で市長が処罰した船頭にR派弁護士カーテルタス[William Keteltas]が味方し、市長の弾劾を州下院に請願したが却下され、却って投獄された。民衆は彼を自由の闘士と讃えて氣勢をあげ、一ヶ月後に彼は釈放された―Rは、九六年州下院選挙で彼を自派の候補に推挙[落選]がFの市長と民衆との公然たる衝突に導いた。つまり市長は、自己の弾劾・解任請願に署名したMCに対して、免許の更新を拒否、他方多くのMCは、彼ら

の基本的権利に敵対する市長の権力濫用に激怒し（Cが反F・反市長連合の中核）、その感情のはけ口をR派にみい出したのである。⁵² ④船頭事件は、一七九六年州下院選挙での主要論点となったが、コメントを避け、事件から超然として、R系紙紙上でCを裏切ったFと結び付いていると非難されたC出身議員ラム（彼はまた、F支援を表明しなければ覚悟せよと某老夜警を脅かしたと噂された）は、Rから再指名を拒否され、再びFの後援を頼まざるをえなかった。彼は少差で再選されたが、前年よりその人氣は急落（六区での得票は前回が四〇八票、今回は一八九票。七区ではそれぞれ三五六票と二二〇票）、六、七区が、下町の富裕諸区と違って、R主義へ傾斜したことが示された。ただし、この選挙ではFが一二議席を独占、全般的にいえば、富裕MCはなおFを、中下層MCがRを支持していく傾向があったのである。⁵³

③一七九七―一八〇一年ころ

△A▽ ①一七九七年の市での州下院選挙でRは、九〇年代で始めて圧勝した（R各候補の得票は一、六〇〇と二、一〇〇票、Fのそれは六〇〇―七〇〇票。とくに六区での平均勝敗差は、六〇〇―四〇〇票）。しかし九七年一月、市長が市民のCへの不満（詐欺など不当行為に対して）を口実に免許状を回収・点検したとき、Rは期待を裏切って、C保護、市長弾劾に立ち上らなかった。思うに、市長のCの公民権否定が経済的不安と相まってCを非恭順、さらに従来以上に反社会的にさせたが、大商人と有力MCから成るR指導部は、F同様Cのエリートへの畏敬を望み、九七年のときのようにそれが欠ける場合はCに何の支援も与えようとはしなかったのである。また、Cを度し難い破落戸とみなした世論も、当局の統制の緩和（レセフェール）でなくむしろ既存の規制の厳格な励行を求めていたのである（もともとCの政治力が、当局の統制を制約した）。こうしてR系紙は、問題は規制自体ではなくその管理者（市長にあるとすると同時に、Cは政治力を盾に公の信頼を裏切っていると論じた。一方、市長に虐待されて不幸となったCは、規制を不便で掠奪的とみる反面、保護規制の絆を切って営業の自由へと進むことを望まず、やはり問題は規制の執行者にあるとし、市長職へのより大なる支配力をえようとした。⁵⁴ ②なお一七九〇年代のCは、前期同様六、七区に群居したが、とくに六区ではリード通りに密集していた。またRは、市長に不満なCを九八年までに味方にし、彼らの群居する七区を自派一辺倒にすることができた。⁵⁵

△B▽ ④Fは不忠誠なCに免許を与えないと、また、F商人はRに投票したCを雇用しないと噂されたが、これらの脅しに対してCは、経済的圧力に屈せず政治的中立を確認し、Rは、Fの威圧による票集めを非難して逆に熱心にC票の獲得に努めた。すなわちRは、独立革命の理念を喚起させてFを暴君のような特権層と攻撃し（自由独立人と自己認知していたCは、これに共鳴）、また、公民権を経済的利益のみならず政治的自

由と権利とに結び付け、それらに無関心な新しい移民（その母国では、労働者には公民権がなかった）に職を奪われるとのCの不安をかき立てた。しかし九九年の市での州下院選挙では、六区（Rは一、〇五九票中、五七・四％を獲得）以外でF票がR票を上回った（七区では、Fが九九四票中五五・三％をえた）。R系紙は、「選挙の結果、Cは家臣にされてしまった」と嘆いた。思えば、このころのある男優の経験（Cに挨拶しなかった男優が、その無礼を比喻によって大商人に咎められたことは、いくらかのCと大商人との経済的・精神的ゆ着が、なお存在したことを示していた）。⑤一八〇〇年の州下院選挙に向ってRは、間断なくCに訴えた。すなわち、過去のCへの迫害を指摘、Cが大商人、法律家、医師の同輩として処遇されないのは罪悪だと示唆し、Cに団結して敵に反抗することを求め、さらに、成年男子参政権と市長公選を提唱するとともに、Cを中流層と描き、慣習に頼って投票しないように忠告し、また一七七六年の精神の想起を勧め、RはCの独立・平等の媒介者・救済者と称し、Fへの票は暴政へのそれであり、Rへの票は自由へのそれであると宣伝した。だがRは、一時的優位をえたとしても、長い戦いに勝つ手段を発見し難かった。なぜならRは、F派の「仕事を保障する党派」という心象を払しょくできず、すべてのCの信頼を獲得できなかったからである。しかし、選挙数日前にF派が多数の参事会は、CT取り締まり条例細目説明書を公刊してCを立腹させた。こうして市での選挙では、全市で五、八六九票の五二・七％をえたRが勝利した（R候補は六区で平均八二三票、七区で同七八二票を獲得）。Cは、もはや辱められて屈服する必要はなくなったと喜んだが、CのR支持の鍵は、Cの独立と自業への誇りであったのである。⑥一八〇一年、Cの紛失した馬に補償金を与えると定めたF派が多数の参事会の決議は、FのCへの賄賂とRから非難された。同年の参事会選挙でのRの勝利は、長引いたRの労苦の完成であった。またR派が多数となった任命院は、市長をすげ替えてCの意向に副った。今や、いくらかのCは、パトロネジと公私のFとのコネにこだわったままであったが、Fの地位と影響力が低下していくのに気付いたCは、Rの主張に引き寄せられ、また参政権の平等を強調したCは、恒常的に増加する公民権のないCを引き付けることができた。ここにおいてRは、FとCTとの史的絆に打ち克つことができ、一方Fの高圧的なやり方は、ますますCを疎外し、多くのCのF支持は消滅していった。⑦実際Cは、公民権が免許状交付の一部として与えられることの復活を熱望していた。三〇〇人のCが署名した復活請願が新市長E・Lに出され、彼は、同胞市民の福祉・幸福に資する条例の制定には常に協力するつもりであるとの意志を表明した。そこでCは、「C委員会」を結成して参事会員を訪問せしめ、彼らの賛同をえんとした。しかし、Cが、自由土地保有者に有害な非自由土地保有者を選ぶ危険があるとの口実で、反対したF派参事会員のために事は成らなかった。今やCは、市長のみならず参事会自体、

市の政治体制の変更を必要とした(たがそれは、十九世紀の課題であった)。十八世紀末のCの主目標は公民権の復活であり、バリックの追放ばかりでなく、市長職を支配する権利(結局、Cの自治)をえたいという希望を示しただけであった。⁵⁹

おわりに

以上、十八世紀におけるCの実態と動向がいささか明らかとなり、それをここに重言するまでもなく、そのユニークさを指摘できたと思う。要するにCは、基本的にはMC一般と共通の路線を歩み、彼らのアメリカの政治的民主化や経済の発展に貢献した役割を否定することはできない。しかしなお、MC一般とデリケートな相違(例えば、Cの「MC委員会」への不参加や、「商工業者協会」の自己の推薦候補者からのC排除)がみられたのである。ともかく彼らが、大商人や市当局との伝統的な絆に依存するかぎり、彼らの近代資本家としての将来への展望は、苦渋に満ちたものであった。

また筆者は、革命前以来のこの絆の確認、革命での勤王・愛国兩派への分裂、一七九〇年代の公民権の有無による分裂をみるとき、その行動が政治理論よりも生活保障に左右されたニューヨーク・テナントとの相似を、想起せざるをえないのである。⁶⁰

註

- ① Jesse Lemisch, "The American Revolution Seen from the Bottom Up" in the *Towards A New Past* ed. by Berton J. Bernstein (1968), 6.
- ② 筆者、『独立宣言以前のニューヨーク市メカニック』(三重大学教育学部紀要31巻3号 [1980]—以下第一論文と略記)、『ニューヨークにおけるアメリカ革命』(同志社アメリカ研究6号 [1970]—以下第二論文と略記)、『アメリカ革命とニューヨーク市メカニックス』(ちびと33号 [1976]—以下第三論文と略記)。
- ③ Graham R. Hodges, "The Cartmen of New York City 1667-1801", Ph. D. dissertation, New York Univ. (1982—以下CNYCと略記)。
- ④ I 〇〇は' Ibid., Chap. I.
- ⑤ Richard B. Morris, *Government in Early America* (1946—以下GLEAと略記), 157; Samuel McKee Jr., *Labor in Colonial New York 1664-1776* (1935), 170.
- ⑥ GLEA, 158.
- ⑦ I 〇〇は' CNYC, Chap. II.
- ⑧ Beverly McAnear, "The Place of the Freeman in Old New York", *New York History*, XXI (1940), 418-30; cf. Gary B. Nash, *The Urban Crucible*

『十八世紀におけるニューヨーク市カートメン』

『十八世紀におけるニューヨーク市カートス』

ble (1979—以下UCと略記), 29, 31, 35.

- ⑨ Bruce M. Wilkenfeld, "New York City Neighborhoods, 1730", New York History, LVII (1976), 171, 174.
- ⑩ 1の国は, CNYC, Chap. III.
- ⑪ UC, 216-7.
- ⑫ UC, 14-6.
- ⑬ Eric Foner, Tom Paine and the Revolutionary America (1976), 46.
- ⑭ UC, Appendix, Table 5.
- ⑮ 1の国は, CNYC, Chap. IV.
- ⑯ 第二論文参照。
- ⑰ 1の国は, CNYC, 82-7.
- ⑱ 第二論文, 65-7.
- ⑲ William H. W. Sabine ed., Historical Memoris from 16 March 1763 to 9 July 1776 of William Smith (1956), 103.
- ⑳ 第一論文, 67; 第二論文, 6; Patricia U. Bonomi, A Factious People (1971), 239-46, 248-57.
- ㉑ CNYC, 90-2.
- ㉒ Ibid., 93-101.
- ㉓ 第一論文, 68-9.
- ㉔ CNYC, 97-101.
- ㉕ 第二論文, 12-3.
- ㉖ CNYC, 102-4.
- ㉗ Oscar T. Bark Jr., New York City during the War for Independence (1931), 98-120; Tomas F. Jones, History of New York during the Rovolutionary War (1879), 68-70, 81.
- ㉘ John A. Stevens ed., Colonial Records of the New York Chamber of Commerce, 1768-84(1867), 210, 214.
- ㉙ CNYC, 109-11.
- ㉚ Edward P. Wills, "Social Origins of Political Leadership in New York City from the Revolution to 1815", Ph. D. dissertation, Univ. of California (1967—以下SOPLと略記), 10, 14-7; Staughton Lynd, "The Mechanics in New York Politics, 1774-88", Labor History, V (1964—以下MNYPと略記), 235-7; 第二論文, 24-5.
- ㉛ CNYC, 113-6.

- ② *SOPL*, 16, 18. 一たび、クリントン派、反クリントン派については、第二論文, 15-22.
- ③ *MNYP*, 239-45; Jackson T. Main, *The Social Structure of Revolutionary America* (1965), 79-83, 132-5, 274-5.
- ④ *CNYC*, 122-5.
- ⑤ *Ibid.*, 125-9.
- ⑥ *Ibid.*, 129-34.
- ⑦ Alfred Young, "The Mechanics and Jeffersonians: New York, 1789-1801", *Labor History*, V (1964—以下 *MJNY* の略記), 247; *New York Daily Advertiser* (以下 *NYDA* の略記), January 13, 1791; *CNYC*, 138-42.
- ⑧ *MJNY*, 253-5; Alfred Young, *The Democratic Republicans of New York* (1967—以下 *DRNY* の略記), 211, 333-5; *NYDA*, September 24, 25, 27, 1791.
- ⑨ *CNYC*, 147-8.
- ⑩ *SOPL*, 66, 68, 70, 72. 一F は一七八七年まで反クリントン派、以後はアンティタリストを、G は一七八七年までクリントン派、以後は反アンティタリストを、R は九四年まで反アンティタリスト、以後はリベリカンを、M は多数派を示す。
- ⑪ *New York Journal* (以下 *NYJ* の略記), April 7, 10, 1792.
- ⑫ *DRNY*, 302; *NYDA*, April 24, June 1, 1792.
- ⑬ *CNYC*, 151-2.
- ⑭ *NYDA*, June 1, August 27, 28, 29, 30, 1792.
- ⑮ *CNYC*, 155, 161-5, 175-6; *SOPL*, 344, 355.
- ⑯ 詳細は第三論文, 3-4.
- ⑰ *MJNY*, 255; *DRNY*, 322; *NYDA*, June 3, 1793; *NYJ*, May 29, June 7, 1793.
- ⑱ *NYDA*, April 10, 1794; *NYJ*, June 7, 1794; *DRNY*, 382-5; *MJNY*, 257.
- ⑲ *DRNY*, 420-1; *MJNY*, 258; *NYJ*, February 7, 1795.
- ⑳ *NYDA*, April 30, 1795; *NYJ*, April 29, May 30, 1795.
- ㉑ *DRNY*, 429-66, 588; *MJNY*, 259.
- ㉒ *DRNY*, 476-93; *MJNY*, 261-2; *New York Argus* (以下 *NYA* の略記), April 26, 27, 1796.
- ㉓ *NYJ*, June 10, 1796; *DRNY*, 456-6, 490-1; *MJNY*, 260, 262.
- ㉔ *NYJ*, June 4, 1797, February 28, 1798; *NYA*, April 24, 1797; *DRNY*, 494; *MJNY*, 262; *NYDA*, November 14, 16, 1797; Howard R. Rock, *Artisans of the New Republic* (1979), 55.

『十八世紀におけるニューヨーク市カーブス』

『十八世紀におけるニューヨーク市カートス』

- ⑤ CNYC, 181-2; MJNY, 263.
- ⑥ NYA, April 30, May 1, 2, 7, 8, 1799; SOPL, 72; CNYC, 186-8; MJNY, 263.
- ⑦ American Citizen (以下ACと略記), April 29, 1800; NYA, May 5, 1800; MJNY, 263, 267-8; SOPL, 72.
- ⑧ AC, April 25, August 28, 1810; SOPL, 70.
- ⑨ CNYC, 193-5.
- ⑩ 筆者、『農民とアメリカ革命』(三重の社会科1985年6月号), 13.

(終)